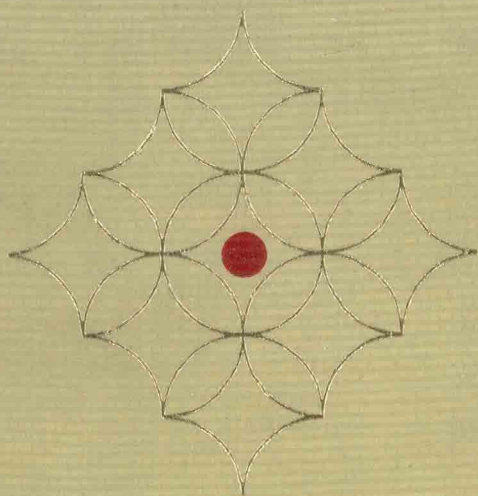


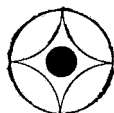


現代日本文學大系

2

福澤諭吉 三宅雪嶺
中江兆民 岡倉天心 集
徳富蘇峰 内村鑑三

筑摩書房



現代日本文學大系 2

昭和四十七年七月二十八日
昭和四十八年十月二十日

初版第一刷発行
初版第二刷発行

福澤諭吉 三宅雪嶺
中江兆民 岡倉天心 集
徳富蘇峰 内村鑑三

著者

発行者

福澤諭吉 三宅雪嶺
中江兆民 岡倉天心
徳富蘇峰 内村鑑三
井上達三

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一
電話東京(二九)七六五一
振替口座東京四一二三

印刷 株式会社 精興社

製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたしません

(分類) 0395 (製品) 10002 (出版社) 4604

目次

卷頭写真
筆蹟

徳富蘇峰集

将来之日本

嗟呼国民之友生れたり

近来流行の政治小説を評す

福澤諭吉集

文明論之概略

学問のすすめ(抄)

中江兆民集

一年有半

統一年有半

三宅雪嶺集

真善美日本人

偽悪醜日本人

岡倉天心集

東洋の理想

茶の本

一五

三五

三五

三五

三

三

三

二九

三

三

内村鑑三集

基督信徒の慰

三二

後世への最大遺物

三二

病的愛国心

三二

〔付録〕

福沢における秩序と人間 丸山眞男

三二

福沢の歴史観と愛国論 小泉信三

三六

故中江篤介君の葬儀に就て

大石正巳 三六

徳富蘇峰と平民主義 松田智雄

三二

調和的人生論とその根柢 本山幸彦

三七

次兄天心をめぐる 岡倉由三郎 四二

内村鑑三と北海道と札幌農

学校 下村寅太郎 四三

年譜 四九

著作目録 四二

福澤諭古集

先臨如失才解其誰識
事之見多幸今初小生
相會友彈琵琶表讀
為人 讀

文明論之概略

文明論之概略緒言

文明論とは人の精神発達の議論なり。其趣意は一人の精神発達を論ずるに非ず、天下衆人の精神発達を一体に集めて、其一体の発達を論ずるものなり。故に文明論、或は之を衆心発達論と云ふも可なり。蓋し人の世に処するには局処の利害得失に掩はれて其所見を誤るもの甚だ多し。習慣の久しきに至ては殆ど天然と人為とを区別す可らず。其天然と思ひしもの、果して習慣なることあり。或は其習慣と認めしもの、却て天然なることなきに非ず。此紛擾難駁の際に就て条理の紊れざるものを求めんとすることなれば、文明の議論亦難しと云ふ可し。

今の西洋の文明は羅馬の滅後より今日に至るまで大凡そ一千有余年の間に成長したるものにて、其由来頗る久しと云ふ可し。我日本も建国以来既に二千五百年を経て、我邦一己の文明は自から進歩して其達する所に達したりと雖ども、之を西洋の文明に比すれば趣の異なる所なきを得ず。嘉永年中米人渡来、次で西洋諸国と通信貿易の条約を結ぶに及で、我國の人民始めて西洋あるを知り、彼我の文明の有様を比較して大に異別あるを知り、一時に耳目を驚かして恰も人心の騷亂を生じたるが如し。固より我二千五百年の間、世の治乱興廢に由て人を驚かしたることなきに非ずと雖ども、深く人心の内部を犯して之を感動せしめたるものは、上古、儒仏の教を支那より伝へたるの一事を初と爲し、其後は特に晩近の外交を以て最とす。加之、儒仏の教は亜細亜の元素を伝へて亜細亜に施したることなれば、唯粗密の差あるのみ

にて之に接すること難からず。或は我ためには新にして奇ならずと云ふも可なりと雖ども、彼の晩近の外交に至ては則ち然らず。地理の区域を異にし、文明の元素を異にし、其元素の發育を異にし、其發育の度を異にしたる特殊異別のものに逢ふて頗る近く相接することなれば、我人民に於て其事の新しいて珍らしきは勿論、事々物々見るとして奇ならざるはなし、聞くとして怪ならざるはなし。之を譬へば極熱の火を以て極寒の水に接するが如く、人の精神に波瀾を生ずるのみならず、其内部の底に徹して転覆回旋の大騷亂を起さざるを得ざるなり。

此人心騷亂の事跡に見はれたるものは、前年の王制一新なり、次で廢藩置縣なり。以て今日に及ぶることなれども、是等の諸件を以て止む可きに非ず。兵馬の騷亂は数年前に在て既に跡なしと雖ども、人心の騷亂は今尚依然として日に益甚しと云ふ可し。蓋し此騷亂は全国の人民文明に進まんとするの奮発なり。我文明に満足せずして西洋の文明を取らんとするの熱心なり。故に其期する所は、到底我文明をして西洋の文明の如くならしめて之と並立する歟、或は其右に出るに至らざれば止むことなかる可し。而して彼の西洋の文明も今正に運動の中に在て日に月に改進するものなれば、我國の人心も之と共に運動を與にして遂に消息の期ある可らず。実に嘉永年中米人渡来の一挙は恰も我民心に火を点じたるが如く、一度び燃へて又これを止む可らざるものなり。

人心の騷亂斯の如し。世の事物の紛擾難駁なること殆ど想像す可らざるに近し。此際に當て文明の議論を立て条理の紊れざるものを求めんとするは、學者の事に於て至大至難の課業と云ふ可し。西洋諸國の學者が日新の説を唱へて、其説随て出れば随て新にして人の耳目を驚かすもの多しと雖ども、千有余年の沿革に由り先人の遺物を伝へて之を切磋琢磨することなれば、假令ひ其説は新奇なるも、等しく同一の元素より發生するものにて新に之を造るに非ず。之を我國今日の有様に比して豈同日の論ならんや。今の我文明は所謂火より水に交じ、無より有に移らんとするものにて、卒突の変化、雷に之を改進と云ふ

可らず、或は始造と称するも亦不可なきが如し。其議論の極めて困難なるも謂れなきに非ざるなり。

今の学者は此困難なる課業に当ると雖ども、爰に亦偶然の僥倖なきに非ず。其次第を云へば、我國開港以來、世の学者は頻に洋學に向ひ、其研究する所固より粗鹵狹隘なりと雖ども、西洋文明の一斑は彷彿として窺ひ得たるが如し。又一方には此学者なるもの、二十年以前は純然たる日本の文明に浴し、嘗に其事を聞見したるのみに非ず、現に其事に當て其事を行ふたる者なれば、既往を論ずるに臆測推量の曖昧に陥ること少なくして、直に自己の経験を用いて之を西洋の文明に照らすの便利あり。此一事に就ては、彼の西洋の学者が既に体を成したる文明の内に居て他国の有様を推察する者よりも、我学者の経験を以て更に確實なりとせざる可らず。今の学者の僥倖とは即ち此実験の一事にして、然も此実験は今の一世を過れば決して再び得べからざるものなれば、今の時は殊に大切なる好機會と云ふ可し。試に見よ、方今我國の洋學者流、其前年は悉皆漢書生ならざるはなし、悉皆神仏者ならざるはなし。封建の士族に非ざれば封建の民なり。恰も一身にして二生を経るが如く一人にして兩身あるが如し。二生相比し兩身相較し、其前生前身に得たるものを以て之を今生今身に得たる西洋の文明に照らして、其形影の互に反射するを見れば果して何の觀を為す可きや。其議論必ず確實ならざるを得ざるなり。蓋し余が彷彿たる洋學の所見を以て、敢て自から賤劣を顧みず此冊子を著すに當て、直に西洋諸家の原書を訳せず、唯其大意を斟酌して之を日本の事實に參合したるも、余輩の正に得て後人の復た得べからざる好機會を利して、今の所見を遺して後の備考に供せんとするの微意のみ。但其議論の粗鹵にして誤謬の多きは固より自から懺悔白狀する所なれば、特に願くば後の學者、大に學ぶことありて、飽くまで西洋の諸書を読み飽くまで日本の事情を詳にして、益所見を博くし益議論を密にして、真に文明の全大論と稱す可きものを著述し、以て日本全国の面を一新せんことを企望するなり。余も亦年未だ老したるに非ず、他日必ず此大舉あらんこと

を待ち、今より更に勉強して其一臂の助たらんことを樂しむのみ。

書中西洋の諸書を引用して其原文を直に訳したるものは其著書の名を記して出典を明にしたれども、唯其大意を撮て之を訳する歟、又は諸書を參考して趣意の在る所を探り、其意に拠て著者の論を述べたるものは、一々出典を記す可らず。之を譬へば食物を喰て之を消化したるが如し。其物は外物なれども、一度び我に取れば自から我身内の物たらざるを得ず。故に書中稀に良説あらば、其良説は余が良説に非ず、食物の良なる故と知る可し。

此書を著はすに當り、往々社友に謀て或は其所見を問ひ、或は其嘗て読たる書中の議論を聞て益を得ること少なからず。就中小幡篤次郎君へは特に其閱見を煩はして正刪を乞ひ、頗る理論の品価を増たるもの多し。明治八年三月二十五日、福沢諭吉記。

卷之一

第一章 議論の本位を定る事

輕重長短善惡是非等の字は相對したる考より生じたるものなり。輕あらざれば重ある可らず、善あらざれば惡ある可らず。故に輕とは重よりも輕し、善とは惡よりも善しと云ふことにて、此と彼と相對せざれば輕重善惡を論ず可らず。斯の如く相對して重と定り善と定りたるものを議論の本位と名く。諺に云く、腹は背に替へ難し。又云く、小の虫を殺して大の虫を助くと。故に人身の議論をするに、腹の部は背の部よりも大切なるものゆゑ、寧ろ背に疵を被るも腹をば無難に守らざる可らず。又動物を取扱ふに、鶴は鶴よりも大にして貴きものゆゑ、鶴の餌には鱸を用ふるも妨なしと云ふことなり。譬へば日本にて封建の時代に大名藩士無為にして衣食せしものを、其制度を改めて今の如く為したるは、徒に有産の輩を覆して無産の難波に陥れたるに似たれど

も、日本国と諸藩とを對すれば、日本国は重し、諸藩は輕し、藩を廢するは猶腹の背に替へられざるが如く、大名藩士の祿を奪ふは鱈を殺して鰻を養ふが如し。都て事物を詮索するには枝末を払て其本源に溯り、止る所の本位を求めざる可らず。斯の如くすれば議論の簡索は次第に減じて其本位は益々確実なる可し。「ニウトン」初て引力の理を發明し、凡そ物、一度び動けば動て止まらず、一度び止まれば、止まりて動かずと、明に其定則を立てより、世界万物運動の理、皆これに由らざるはなし。定則とは即ち道理の本位と云ふも可なり。若し運動の理を論ずるに當て、この定則なかりせば其議論區々にして際限あることなく、船は船の運動を以て理の定則を立て、車は車の運動を以て論の本位を定め、徒に理論の箇条のみを増して其帰する所の本は一なるを得ず、一ならずれば則ち亦確実なるを得ざる可し。

議論の本位を定めざれば其利害得失を論ず可らず。城郭は守る者のために利なれども攻る者のためには害なり。敵の得は味方の失なり。往者の便利は來者の不便なり。故に是等の利害得失を論ずるには、先づ其ためにする所を定め、守る者のため歟、攻る者のため歟、敵のため歟、味方のため歟、何れにても其主とする所の本を定めざる可らず。古今の世論多端にして互に相齟齬するものも、其本を尋れば初に所見を異にして、其末に至り強ひて其枝末を均ふせんと欲するに由て然るものなり。譬へば神仏の説、常に合はず、各其主張する所を聞けば何れも尤の様に聞ゆれども、其本を尋れば神道は現在の吉凶を云ひ、仏法は未來の禍福を説き、議論の本位を異にするを以て兩説遂に合はざるなり。漢儒者と和學者との間にも爭論ありて千緒万端なりと雖ども、結局其分るゝ所の大趣意は、漢儒者は湯武の放伐を是とし、和學者は一系万代を主張するに在り。漢儒者の因却するは唯この一事のみ。斯の如く事物の本に還らずして末のみを談ずるの間は、神儒仏の異論も落着するの目なくして、其趣は恰も武用に弓矢劍鎗の得失を争ふが如く際限ある可らず。若し之を和睦せしめんと欲せば、其各主張する所のものよりも一層高尚なる新説を示して、自から新旧の得失を判断せ

しむるの一法あるのみ。弓矢劍鎗の爭論も嘗て一時は喧しきことなりしが、小銃の行はれてより以來は世上に之を談ずる者なし。神官の説に道にも神、葬祭の法あるゆゑ未來を説くなりと云ひ、又僧侶の説を聞かば、法華宗などは加持祈禱の仕業もあるゆゑ法に於ては現在の吉凶を重んずるものなりと云ひ、必ず込入たる議論を述べるならん。されども是等は皆神仏混合の久しきに由り、僧侶が神官の真似を試み、神官が僧侶の職分を犯さんとせしむるのみにて、神仏兩教の大趣意を論ずれば、一は未來を主とし一は現在を主とするものと、数千年來の習慣を見ても明なり。今日又喋々たる議論を聞くに足らず。

又議論の本位を異にする者を見るに、説の末は相同じきに似たれども中途より互に枝別して其帰する所を異にすることあり。故に事物の利害を説くに、其これを利としこれを害とする所を見れば兩説相同じと雖ども、これを利としこれを害とする所以の理を述るに至れば、其説、中途より相分れて歸する所同じからず。譬へば頑固なる士民は外國人を惡むを以て常とせり。又學者流の人にても少しく見識ある者は外人の舉動を見て決して心酔するに非ず、之を悦ばざるの心は彼の頑民に異なることなしと云ふも可なり。此一段までは兩説相投するが如くなれども、其これを悦ばざるの理を述るに至て始めて齟齬を生じ、甲は唯外國の人を異類のものとして認め、事柄の利害得失に拘はらずして只管これを惡むのみ。乙は少しく所見を遠大にして、唯これを惡み嫌ふには非ざれども、其實際上より生ず可き弊害を思慮し、文明と稱する外人にても我に對して不公平なる処置あるを忿るなり。双方共に之を惡むの心は同じと雖ども、之を惡むの源因を異にするが故に、之に接するの法も亦一様なるを得ず。即是れ攘夷家と開國家と、説の末を同ふすれども中途より相分れて其本を異にする所なり。都て人間万事遊嬉宴樂のことに至るまでも、人々其事を共にして其好尚を別にするもの多し。一時其人の舉動を皮相して遽に其心事を判断す可らざるなり。又或は事物の利害を論ずるに、其極度と極度とを持出して議論の始より相分れ、双方互に近づく可らざることあり。其一例を挙て云はん。今、人民同權の新説を述る者あれば、古風家の人はいこれを聞て忽ち合衆政治の論と視做し、今我日本にて合衆政治の論を主張せば我國体を如何せんと云ひ、遂には不測の禍あらんと云ひ、其心配の模様は恰も今に無君無政の大乱に陥らんとてこれを恐怖するもの、如く、議論の

始より未来の未来を想像して、未だ同権の何物たるを糺さず、其趣旨の在る所を問はず、只管これを拒むのみ。又彼の新説家も始より古風家を敵の如く思ひ、無理を犯して旧説を排せんとし、遂に敵対の勢を為して議論の相合ふことなし。畢竟双方より極度と極度を持出だすゆゑ此不都合を生ずるなり。手近くこれを譬へて云はん。爰に酒客と下戸と二人ありて、酒客は餅を嫌ひ下戸は酒を嫌ひ、等しく其害を述て其用を止めんと云ふことあらん。然るに下戸は酒客の説を排して云く、餅を有害のものとなし、我國數百年來の習例を廢して正月の元旦に茶漬を喰ひ、餅屋の家業を止めて國中に餅米を作することを禁ず可きや、行はる可らざるなりと。酒客は又下戸を駁して云く、酒を有害のものとなせば明日より天下の酒屋を毀ち、酩酊する者は嚴刑に処し、藥品の酒精には甘酒を代用と爲し、婚禮の儀式には水盃を爲す可きや、行はる可らざるなりと。斯の如く異説の兩極相接するときは其勢必ず相衝て相近づく可らず、遂に人間の不和を生じて世の大害を爲すことあり。天下古今に其例少なからず。此不和なるもの學者士君子の間に行はるゝときは、舌と筆とを以て戦ひ、或は説を吐き或は書を著し、所謂空論を以て人心を動かすことあり。唯無学文盲なる者は舌と筆とを用ゐること能はずして筋骨の力に依頼し、動もすれば暗殺等を企ることに多し。

又世の議論を相駁するものを見るに、互に一方の翼を撃て双方の真面目を顯し得ざることあり。其翼とは事物の一例一得に伴ふ所の弊害を云ふなり。譬へば田舎の百姓は正直なれども頑愚なり、都會の市民は伶俐なれども輕薄なり。正直と伶俐とは人の美德なれども、頑愚と輕薄とは常に之に伴ふ可き弊害なり。百姓と市民との議論を聞くに、其争端この処に在るもの多し。百姓は市民を目して輕薄兒と称し、市民は百姓を罵て頑陋物と云ひ、其状情恰も双方の匹敵各片眼を閉じ、他の美を見ずして其醜のみを窺ふものゝ如し。若し此輩をして其兩眼を開かしめ、片眼以て他の所長を察し片眼以て其所短を見せしめなば、或は其長短相償ふてこれがため双方の争論も和することあらん。或は

其所長を以て全く所短を掩ひ、其争論止むのみならず、遂には相友視して互に益を得ることもある可し。世の學者も亦斯の如し。譬へば方今日本にて議論家の種類を分てば古風家と改革家と二流あるのみ。改革家は穎敏にして進て取るものなり、古風家は実着にして退て守るものなり。退て守る者は頑陋に陥るの弊あり、進て取る者は輕率に流るの患あり。然りと雖ども、実着は必ずしも頑陋に伴はざる可らざるの理なし、穎敏は必ずしも輕率に流れざる可らざるの理なし。試に見よ、世間の人、酒を飲て酔はざる者あり、餅を喰ふて食傷せざる者あり。酒と餅とは必ずしも酩酊と食傷との原因に非ず、其然ると然らざるとは唯これを節する如何に在るのみ。然ば則ち古風家も必ず改革家を惡む可らず、改革家も必ず古風家を侮る可らず。爰に四の物あり、甲は実着、乙は頑陋、丙は穎敏、丁は輕率なり。甲と丁と當りて乙と丙と接すれば、必ず相敵して互に輕侮せざるを得ずと雖ども、甲と丙と逢ふときは必ず相投じて相親まざるを得ず。既に相親むの情を發すれば始めて双方の真面目を顯はし、次第に其敵意を鎔解するを得べし。昔封建の時に大名の家來、江戸の藩邸に住居する者と国邑に在る者と、其議論常に齟齬して同藩の家中殆ど讐敵の如くなりしことあり。是亦人の真面目を顯はさざりし一例なり。是等の弊害は固より人の智見の進むに従て自から除く可きものとは雖ども、之を除くに最も有力なるものは人と人との交際なり。其交際は、或は商売にても又は學問にても、甚しきは遊芸酒宴或は公事訴訟喧嘩戰爭にても、唯人と人と相接して其心に思ふ所を言行に發露するの機会となる者あれば、大に双方の人情を和はらげ、所謂兩眼を開て他の所長を見るを得べし。人民の會議、社友の演説、道路の便利、出版の自由等、都て此類の事に就て識者の眼を着する由縁も、この人民の交際を助るがために殊に之を重んずるものなり。

都て事物の議論は人々の意見を述べたるものなれば固より一樣なる可らず。意見高遠なれば議論も亦高遠なり、意見近浅なれば議論も亦近浅なり。其近浅なるものは、未だ議論の本位に達すること能はずし

て早く既に他の説を駁せんと欲し、これがため兩説の方向を異にすることあり。譬へば今外国交際の利害を論ずるに、甲も開国の説なり、乙も開国の説にて、遽にこれを見れば甲乙の説符合するに似たれども、其甲なる者漸く其論説を詳にして頗る高遠の場合に至るに従ひ、其説漸く乙の耳に逆ふて遂に双方の不和を生ずることあるが如き、是なり。蓋し此乙なる者は所謂世間通常の人物にして通常の世論を唱へ、其意見の及ぶ所近浅なるが故に、未だ議論の本位を明にすること能はず、遽に高尚なる言を聞て却て其方向を失ふものなり。世間に其例少なからず。猶かの胃弱家が滋養物を喰ひ、これを消化すること能はずして却て病を増すが如し。この趣を一見すれば、或は高遠なる議論は世のために有害無益なるに似たれども、決して然らず。高遠の議論あらざれば後進の輩をして高遠の域に至らしむ可き路なし。胃弱を恐れて滋養を廃しなば患者は遂に斃る可きなり。此心得違ふよりして古今世界に悲む可き一事を生ぜり。何れの國にても何れの時代にてても、一世の人民を視るに、至愚なる者も甚だ少なく至智なる者も甚だ稀なり。唯世に多き者は、智愚の中間に居て世間と相移り罪もなく功もなく互に相雷同して一生を終る者なり。此輩を世間通常の人物と云ふ。所謂世論は此輩の間に生ずる議論にて、正に当世の有様を摸出し、前代を顧て退くこともなく、後世に向て先見もなく、恰も一処に止て動かざるが如きものなり。然るに今世間に此輩の多くして其衆口の喧しきがためにとて、其所見を以て天下の議論を画し、僅にこの画線の上に出るものあれば則ちこれを異端妄説と称し、強ひて画線の内に引入れて天下の議論を一直線の如くならしめんとする者あるは、果して何の心ぞや。若し斯の如くならしめなば、かの智者なるものは國のために何等の用を為す可きや。後來を先見して文明の端を開かんとするには果して何人に依頼す可きや。思はざるの甚しきものなり。試に見よ、古来文明の進歩、其初は皆所謂異端妄説に起らざるものなし。「アダム・スミス」が始て経済の論を説きしときは世人皆これを妄説として駁したるに非ずや。「ガリレオ」が地動の論を唱へしときは異端と称

して罪せられたるに非ずや。異説爭論年又年を重ね、世間通常の群民は恰も智者の鞭撻を受けて知らず識らず其範圍に入り、今日の文明に至ては学校の童子と雖ども経済地動の論を怪む者なし。嘗にこれを怪まざるのみならず、此議論の定則を疑ふものあれば却てこれを愚人として世間に齒ひせしめざるの勢に及べり。又近く一例を挙て云へば、今を去ること僅に十年、三百の諸侯各一政府を設け、君臣上下の分を明にして生殺与奪の權を執り、其堅固なることこれを万歳に伝ふ可きが如くなりしもの、瞬間に瓦解して今の有様に変じ、今日と為りては世間にこれを怪む者なしと雖ども、若し十年前に当て諸藩士の内に廢藩置縣等の説を唱る者あらば、其藩中にてこれを何とか云はん。立どころに其身を危ふすること論を俟たざるなり。故に昔年の異端妄説は今世の通論なり、昨日の奇説は今日の常談なり。然ば則ち今日の異端妄説も亦必ず後年の通論常談なる可し。学者宜しく世論の喧しきを憚らず、異端妄説の議を恐るゝことなく、勇を振て我思ふ所の説を吐く可し。或は又他人の説を聞て我持論に適せざることあるも、よく其意の在る所を察して、容る可きものは之を容れ、容る可らざるものは暫く其向ふ所に任して、他日双方帰する所を一にするの時を待つ可し。即是れ議論の本位を同ふするの日なり。必ずしも他人の説を我範圍の内に籠絡して天下の議論を画一ならしめんと欲する勿れ。

右の次第を以て事物の利害得失を論ずるには、先づ其利害得失の關る所を察して其輕重是非を明にせざる可らず。利害得失を論ずるは易しと雖ども、輕重是非を明にするは甚だ難し。一身の利害を以て天下の事を是非す可らず、一年の便不便を論じて百歳の謀を誤る可らず。多く古今の論説を聞き、博く世界の事情を知り、虚心平氣以至善の止まる所を明にし、千百の妨碍を犯して世論に束縛せらるゝことなく、高尚の地位を占めて前代を顧み、活眼を開て後世を先見せざる可らず。蓋し議論の本位を定めて之に達する方法を明にし、満天下の人をして悉皆我所見に同じからしめんとするは、固より余輩の企る所に非ずと雖ども、敢て一言を掲て天下の人に問はん。今の時に當て、前に進

まん歟、後に退かん歟、進て文明を逐はん歟、退て野蛮に返らん歟、唯進退の二字あるのみ。世人若し進まんと欲するの意あらば余輩の議論も亦見る可きものあらん。其ことを實際に施すの方法を説くは此書の趣旨に非ざれば之を人々の工夫に任するなり。

第二章 西洋の文明を目的とする事

前章に事物の輕重是非は相對したる語なりと云へり。されば文明開化の字も亦相對したるものなり。今世界の文明を論ずるに、歐羅巴諸國並に亞米利加之合衆國を以て最上の文明國と爲し、土耳其、支那、日本等、亞細亞の諸國を以て半開の國と稱し、阿非利加及び澳太利亞等を目して野蛮の國と云ひ、此名稱を以て世界の通論となし、西洋諸國の人民獨り自から文明を誇るのみならず、彼の半開野蛮の人民も、自から此名稱の誣ひざるに服し、自から半開野蛮の名に安んじて、敢て自國の有様を誇り西洋諸國の右に出ると思ふ者なし。營にこれを思はざるのみならず、稍や事物の理を知る者は、其理を知ること愈深きに從ひ、愈自國の有様を明にし、愈これを明にするに從ひ、愈西洋諸國の及ぶ可らざるを悟り、これを患ひ、これを悲み、或は彼に學てこれに倣はんとし、或は自から勉てこれに對立せんとし、亞細亞諸國に於て識者終身の憂は唯此一事に在るが如し。頭腦なる支那人も近來は俗習生徒を西洋に遣りたり、其憂國の情以て然ば則ち彼の文明半開野蛮の名稱は、世界の通論にして世界人民の許す所なり。其これを許す所以は何ぞや。明に其事実ありて欺く可らざるの確証を見ればなり。左に其趣を示さん。即是れ人類の當に經過す可き階級なり。或は之を文明の齡と云ふも可なり。

第一 居に常處なく食に常品なし。便利を逐ふて群を成せども、便利尽くれば忽ち散じて痕を見ず。或は處を定めて農漁を勤め、衣食足らざるに非ずと雖ども器械の工夫を知らず、文字なきには非ざれども文学なるものなし。天然の力を恐れ、人爲の恩威に依頼し、偶然の禍福を待つのにて、身躬から工夫を運らす者なし。これを野蛮と名く。

文明を去ること遠しと云ふ可し。

第二 農業の道大に開けて衣食具はらざるに非ず。家を建て都邑を設け、其外形は現に一國なれども、其内実を探れば不足するもの甚だ多し。文学盛なれども実學を勤る者少く、人間交際に就ては猜疑嫉妬の心深しと雖ども、事物の理を談ずるときには疑を發して不審を質すの勇なし。摸擬の細工は巧なれども新に物を造るの工夫に乏し、旧を脩るを知て旧を改るを知らず。人間の交際に規則なきに非ざれども、習慣に圧倒せられて規則の体を成さず。これを半開と名く。未だ文明に達せざるなり。

第三 天地間の事物を規則の内に籠絡すれども、其内に在て自から活動を逞ふし、人の氣風快発にして旧慣に感溺せず、身躬から其身を支配して他の恩威に依頼せず、躬から徳を脩め躬から智を研ぎ、古を慕はず今を足れりとせず、小安に安んぜずして未来の大成を謀り、進て退かず達して止まらず、學問の道は虚ならずして發明の基を開き、工商の業は日に盛にして幸福の源を深くし、人智は既に今日に用ひて其幾分を余し、以後後日の謀を爲すもの、如し。これを今の文明と云ふ。野蛮半開の有様を去ること遠しと云ふ可し。

右の如く三段に區別して其有様を記せば、文明と半開と野蛮との境界分明なれども、元と此名稱は相對したるものにて、未だ文明を見ざるの間は半開を以て最上とするも妨あることなし。此文明も半開に對すればこそ文明なれども、半開と雖どもこれを野蛮に對すれば亦これを文明と云はざるを得ず。譬へば今支那の有様を以て西洋諸國に比すれば之を半開と云はざるを得ず。されども此國を以て南阿非利加の諸國に比する歟、近くは我日本上國の人民を以て蝦夷人に比するときは、これを文明と云ふ可し。又西洋諸國を文明と云ふと雖ども、正しく今の世界に在てこの名を下す可きのみ。細にこれを論ずれば足らざるもの甚だ多し。戦争は世界無上の禍なれども、西洋諸國常に戦争を事とせり。盜賊殺人は人間の一大悪事なれども、西洋諸國にて物を盜む者あり人を殺す者あり。国内に党争を結て権を争ふ者あり、権を失ふ

て不平を唱る者あり。況や其外国交際の法の如きは、權謀術數至らざる所なしと云ふも可なり。唯一般に之を見渡しして善盛に趣くの勢あるのみにて、決して今の有様を見て直に之を至善と云ふ可らず。今後數千百年にして世界人民の智徳大に進み太平安樂の極度に至ることあらば、今の西洋諸國の有様を見て慙然たる野蠻の歎を為すこともある可し。是に由てこれを觀れば文明には限なきものにて、今の西洋諸國を以て満足す可きに非ざるなり。

西洋諸國の文明は以て満足するに足らず。然ば則ちこれを捨て、採らざる乎。これを採らざる時は何れの地位に居て安んずる乎。半開も安んず可き地位に非ず、況んや野蠻の地位に於てをや。此二の地位を棄れば別に又歸する所を求めざる可らず。今より數千百年の後を期して彼の太平安樂の極度を持たんとするも、唯是れ人の想像のみ。且文明は死物に非ず、動て進むものなり。動て進むものは必ず順序階級を経ざる可らず。即ち野蠻は半開に進み、半開は文明に進み、其文明も今正に進歩の時なり。歐羅巴と雖ども其文明の由来を尋れば必ずこの順序階級を経て以て今日の有様に至りしものなれば、今の歐羅巴の文明は即ち今の世界の人心を以て僅に達し得たる頂上の地位と云ふ可きのみ。されば今世界中の諸國に於て、仮令ひ其有様は野蠻なるも或は半開なるも、苟も一國文明の進歩を謀るものは歐羅巴の文明を目的として議論の本位を定め、この本位に拠て事物の利害得失を談ぜざる可らず。本書全編に論ずる所の利害得失は、悉皆歐羅巴の文明を目的と定めて、この文明のために利害あり、この文明のために得失ありと云ふものなれば、學者其大趣意を誤る勿れ。

或人云く、世界中の國々相分れて各独立の体を成せば、又隨て人心風俗の異なるあり、國体政治の同じからざるあり。然るに今其國の文明を謀て利害得失悉皆歐羅巴を目的と為すとは不都合ならずや、宜しく彼の文明を探り此の人心風俗を察し、其國体に從ひ其政治を守り、これに適するものを撰て、取る可きを取り捨べきを捨て、始て調和の宜を得べきなりと。答て云く、外国の文明を取て半開の國に施すに

は固より取捨の宜なかる可らず。然りと雖ども文明には外に見はる事物と内に存する精神と二様の區別あり。外の文明はこれを取るに易く、内の文明はこれを求めるに難し。國の文明を謀るには其難を先にして易を後にし、難きものを得るの度に從てよく其深淺を測り、乃ちこれに易きものを施して正しく其深淺の度に適せしめざる可らず。若し或はこの順序を誤り、未だ其難きものを得ずして先づ易きものを施さんとするときは、當に其用を為さざるのみならず却て害を為すこと多し。抑も外に見はる文明の事物とは衣服飲食器械住居より政令法律等に至るまで都て耳目以て聞見す可きものを云ふなり。今この外形の事物のみを以て文明とせば、固より國の人心風俗に從て取捨なかる可らず。西洋各國境を接するの地と雖ども、其趣必ずしも比隣一樣ならず、況や東西隔遠なる亜細亞諸邦に於て悉皆西洋の風に倣ふ可けんや。仮令ひこれに倣ふも之を文明と云ふ可らず。譬へば近來我國に行はるる西洋流の衣食住を以て文明の徴候と為す可きや。斷髮の男子に逢てこれを文明の人と云ふ可きや。肉を喰ふ者を見てこれを開化の人と稱す可きや。決して然る可らず。或は日本の都府にて石室鉄橋を模製し、或は支那人が俄に兵制を改革せんとして西洋の風に倣ひ、巨艦を造り大砲を買ひ、國內の始末を顧みずして漫に財用を費すが如きは、余輩の常に悦ばざる所なり。是等の事物は人力を以て作る可し、錢を投じて買ふ可し。有形中の最も著しきものにて、易中の最も易きものなれば、之を取るの際に當ては固より前後緩急の思慮なくして可ならんや。必ず自國の人心風俗に從はざる可らず、必ず自國の強弱貧富に問はざる可らず。即ち或人所云の人心風俗を察するとは此事なる可し。この一段に就ては余輩固より異論なしと雖ども、或人は唯文明の外形のみを論じて、文明の精神をば捨て、問はざるものゝ如し。蓋し其精神とは何ぞや。人民の氣風即是なり。此氣風は売る可きものに非ず、買ふ可きものに非ず、又人力を以て遽に作る可きものにも非ず。治なく一國人民の間に浸潤して広く全國の事跡に顯はるゝと雖ども、目以て其形を見る可きものに非ざれば、其存する所を知ること甚だ難し。今試

に其在る所を示さん。學者若し広く世界の史類を讀て、亜細亞、歐羅巴の二洲を比較し、其地理産物を問はず、其政令法律に拘はらず、學術の巧拙を聞かず、宗門の異同を尋ねずして、別に此二洲の趣をして互に相懸隔せしむる所のものを求めなば、必ず一種無形のものあるを發明す可し。其物たるやこれを形容すること甚だ難し。これを養へば成長して地球万物を包羅し、これを圧抑すれば萎縮して遂に其形影をも見る可らず。進退あり榮枯ありて片時も動かざることなし。其幻妙なること斯の如しと雖ども、現に亜欧二洲の内に於て互に其事跡に見はるゝ所を見れば、明に其虚ならざるを知る可し。今仮に名を下だして、これを一人人民の氣風と云ふと雖ども、時に就て云ふときはこれを時勢と名け、人に就ては人心と名け、國に就ては國俗又は國論と名く。所謂文明の精神とは即ち此物なり。かの二洲の趣をして懸隔せしむるものは即ち此文明の精神なり。故に文明の精神とは或はこれを一國の人心風俗と云ふも可なり。これに由て考れば、或人の説に西洋の文明を取らんとするも先づ自國の人心風俗を察せざる可らずと云ひしは、其字句足らずして分明ならざるに似たれども、よく其意味を碎てこれを解くときは、即ち文明の外形のみを取る可らず、必ず先づ文明の精神を備へて其外形に適す可きのなる可らずとの意見を述べたるものなり。今余輩が歐羅巴の文明を目的とすると云ふも、此文明の精神を備へんがために、これを彼に求めるの趣意なれば、正しく其意見に符合するなり。唯或人は文明を求めるに當て其形を先にし、忽ち妨碍を除き、外形の文明をして入るに易からしめんとするの相違あるのみ。或人は文明を嫌ふ者に非ず、唯これを好むこと我輩の如く切ならずして、未だ其議論を極めざるのみ。

前論に文明の外形はこれを取るに易く其精神はこれを取るに難しとの次第を述べたり。今又この義を明にせん。衣服飲食器械住居より政令法律等に至るまで皆耳目の聞見す可きものなり。而して政令法律はこれを衣食住居等に比すれば稍や其趣を異にし、耳目以て聞見す可し

と雖ども手を以て握り錢を以て売買す可き実物にあらざれば、これを取るの法も亦稍や難くして衣食住居等の比にあらず。故に今鉄橋石室を以て西洋に擬するは易しと雖ども、政法を改革するは甚だ難し。即是れ我日本にても、鉄橋石室は既に成りて政法の改革は未だ行はれ難く國民の會議も遽に行はる可らざる由縁なり。尚一步を進めて全國人民の氣風を一変するが如きは其事極て難く、一朝一夕の偶然に由て功を奏す可きに非ず。獨り政府の命を以て強ゆ可らず、獨り宗門の教を以て説く可らず、況や僅に衣食住居等の物を改革して外より之を導く可けんや。唯其一法は人生の天然に従ひ、害を除き故障を去り、自から人民一般の智徳を發生せしめ、自から其意見を高尚の域に進ましむるに在るのみ。斯の如く天下の人心を一変するの端を開くときは、政令法律の改革も亦漸く行はれて妨碍なかる可し。人心既に面目を改め政法既に改まれば、文明の基、始めてこゝに立ち、かの衣食住有形の物の如きは自然の勢に従ひ、これを招かずして來り、これを求めずして得べし。故に云く、歐羅巴の文明を求めるには難を先にして易を後にし、先づ人心を改革して次で政令に及ぼし、終に有形の物に至る可し。此順序に従へば、事を行ふは難しと雖ども、実の妨碍なくして達す可きの路あり。此順序を倒にすれば、事は易きに似たれども、其路忽ち閉塞し、恰も牆壁の前に立つが如くして寸歩を進ること能はず、或は其壁前に躊躇する歟、或は寸を進めんとして却て激しく尺を退くことある可し。

右は唯文明を求める順序を論じたるものなれども、余輩決して有形の文明を以て到底無用なりとするに非ず。有形にても無形にても、之を外國に求めるも之を内國に造るも、差別ある可らず。唯其際に前後緩急の用心ある可きのみ。決して之を禁するに非ず。抑も人生の働には際限ある可らず。身体の働あり、精神の働あり。其及ぶ所甚だ広く、其需る所極て多くして、天性自から文明に適するものなれば、苟も其性を害せざれば則ち可なり。文明の要は唯この天然に稟け得たる身心の働を用ひ尽して遺す所なきに在るのみ。譬へば草昧の時代には人皆

腕力を貴び、人間の交際を支配するものは唯腕力の一品にして、實際の權力一方に偏せざるを得ず。人の働を用ること極て狭しと云ふ可し。文化少しく進て世人の精神漸く發生すれば、智力の方にも自から權を占めて腕力と相對し、智力と腕力と互に相制し互に相平均して、聊か權威の偏重を防ぐに足るものあり。人の働を用るに少しく其区域を増したりと云ふ可し。然りと雖ども此腕力と智力とを用るに當て、古は其箇条甚だ少なく、腕力をば専ら戰闘に費して他は顧るに遑あらず。衣食住の物を求めるが如きは僅に戰闘の余力を用るのみ。所謂尚武の風俗是なり。智力も亦漸く其權を得ると雖ども、當時野蠻の人心を維持するに忙はしければ、其働を和好平安の事に施す可らずして、専ら之を治民制人の方便に用ひ、腕力と互に依頼して未だ智力獨立の地位なるものなし。今試に世界の諸國を見るに、野蠻の民は勿論、半開の國に於ても、智徳ある者は必ず様々の關係を以て政府に屬し、其力に依頼して人を治るの事を爲すのみ。或は稀に自から一身のたを謀る者あるも、單に古學を脩る歟、若しくは詩歌文章等の技芸に耽るに過ぎず。人の働を用ること未だ広からずと云ふ可し。人事漸く繁多にして身心の需用次第に増加するに至て、世間に發明もあり工夫も起り、工商の事も忙はしく學問の道も多端にして、又昔日の單一に安んず可らず。戰闘、政治、古學、詩歌等も僅に人事の内の一箇条と爲りて、独り權力を占るを得ず。千百の事業、並に發生して共に其成長を競ひ、結局は此彼同等平均の有様に止て、互に相迫り互に相推して、次第に人の品行を高尚の域に進めざるを得ず。是に於てか始めて智力に全權を執り、以て文明の進歩を見る可きなり。都て人類の働は愈單一なれば其心愈專ならざるを得ず。其心愈專なれば其權力愈偏せざるを得ず。蓋し古の時代には事業少なくて人の働を用ゆ可き場所なく、之がために其力も一方に偏したることなれども、歲月を経るに従て恰も無事の世界を變じて多事の域と爲し、身心のために新に運動の地を開拓したるが如し。今の西洋諸國の如きは正に是れ多事の世界と云ふ可きものなり。故に文明を進るの要は、勉めて人事を忙はしくして需用を繁多

ならしめ、事物の輕重大小を問はず、多々益々これを採用して益精神の働を活潑ならしむるに在り。然り而して、苟も人の天性を妨ることなくば、其事は日に忙はしくして其需用は月に繁多ならざるを得ず。世界古今の實驗に由て見る可し。是即ち人生の自から文明に適する所以にして、蓋し偶然には非ず。之を造物主の深意と云ふも可なり。

此議論を推して考れば、爰に又一の事實を發明す可し。即ち其事實とは、支那と日本との文明異同の事なり。純然たる獨裁の政府又は神政府と稱する者は、君主の尊き由縁を一に天与に帰して、至尊の位と至強の力とを一に合して人間の交際を支配し、深く人心の内部を犯して其方向を定るものなれば、此政治の下に居る者は、思想の向ふ所、必ず一方に偏し、胸中に余地を遺さずして、其心事情に單一ならざるを得ず。心事情多故に世に事變ありて聊かにても此實際の仕組を破るものあれば、事柄の良否に拘はらず、其結果は必ず人心に自由の風を生ず可し。支那にて周の末世に、諸侯各割拠の勢を成して人民皆周室あるを知らざるること數百年、此時に當て天下大に亂ると雖ども、獨裁專一の元素は頗る權力を失ふて、人民の心に少しく余地を遺し自から自由の考を生じたることにや、支那の文明三千余年の間に、異說爭論の喧しくして、黑白全く相反するものをも世に容るゝことを得たるは、特に周末を以て然りとす。老莊楊墨其他百家の説蓋だち孔孟の所謂異端是なり。此異端も孔孟より見ればこそ異端なれども、異端より論ずれば孔孟も亦異端たるを免かれず。今日に至ては遺書も乏しくして之を証するに由なしと雖ども、當時人心の活潑にして自由の氣風ありしは推して知る可し。且つ秦の始皇、天下を一統して書を焚たるも、専ら孔孟の教のみを惡みたるに非らず。孔孟にても楊墨にても都て百家の異說爭論を禁ぜんがためなり。當時若し孔孟の教のみ世に行はれたることならば、秦皇も必ずしも書を焚くには及ばざる可し。如何となれば後世にも暴君は多くして秦皇の暴に劣らざる者ありと雖ども、嘗て孔孟の教を害とせざるを以て知る可し。孔孟の教は暴君の働を妨るに足らざるものなり。然り而して秦皇が特に當時の異說爭論を惡て之を禁じたるは何

ぞや。其衆口の喧しくして特に己が専制を害するを以てなり。専制を害するものとあれば他に非ず、此異説争論の間に生じたるものは必ず自由の元素たりしこと明に証す可し。故に単一の説を守れば、其説の性質は假令純精善良なるも、之に由て決して自由の氣を生ず可らず。自由の氣風は唯多事争論の間に在て存するものと知る可し。秦皇一度此多事争論の源を塞ぎ、其後は天下復た合して永く独裁の一致に歸し、政府の家は屢交代すと雖ども、人間實際の趣は改ることなく、至尊の位と至強の力とを合一合して世間を支配し、其仕組に最も便利なるがために独り孔孟の教のみを世に伝へたることなり。或人の説に、支那は独裁政府と雖ども尚政府の變革あり、日本は一系万代の風なれば其人民の心も自から固陋ならざる可らずと云ふ者あれども、此説は唯外形の名義に拘泥して事實を察せざるものなり。よく事實の在る所を詳にすれば果して反対を見る可し。其次第は、我日本にても古は神政府の旨を以て一世を支配し、人民の心單一にして、至尊の位は至強の力に合するものとして之を信じて疑はざる者なれば、其心事の一方に偏すること固より支那人に異なる可らず。然るに中古武家の代に至り漸く實際の仕組を破て、至尊必ずしも至強ならず、至強必ずしも至尊ならざるの勢と爲り、民心に感ずる所にて至尊の考と至強の考とは自から別にして、恰も胸中に二物を容れて其運動を許したるが如し。既に二物を容れて其運動を許すときは、其間に又一片の道理を雜へざる可らず。故に神政尊崇の考と武力压制の考と之に雜るに道理の考とを以てして、三者各強弱ありと雖ども一として其權力を專にするを得ず。之を專にするを得ざれば其際に自から自由の氣風を生ぜざる可らず。之を彼の支那人が純然たる独裁の一君を仰ぎ、至尊至強の考を一にして一向の信心に感溺する者に比すれば同日の論に非ず。此一事に就ては支那人は思想に貧なる者にして日本人は之に富める者なり。支那人は無事にして日本人は多事なり。心事繁多にして思想に富める者は感溺の心も自から淡泊ならざるを得ず。独裁の神政府にて、日蝕の時に天子席を移し、天文を見て吉凶を卜する等の事を行へば、

人民も自から其風に靡き、益君上を神視して益愚に陥ることあり。方今支那の如きは正に此風を成せりと雖ども、我日本に於ては則ち然らず。人民固より愚にして感溺甚しからざるに非ずと雖ども、其感溺は即ち自家の感溺にして、神政府の余害を蒙りたるものは稍や少なしと云ふ可し。譬へば武家の世に、日蝕あれば天子は席を移したることもあらん、或は天文を窺ひ或は天地を祭りたることもあらんと雖ども、此至尊の天子に至強の力あらざれば、人民は自から之を度外に置くものなし。亦至強の將軍は其威力誠に至強にして一世を威服するものなり。人民の目を以て之を見れば至尊の天威を仰ぐが如くならずして自から之を人視せざるを得ず。斯の如く至尊の考と至強の考と互に相平均して其間に余地を遺し、聊かにて思想の運動を許して道理の働く可き端緒を開きたるものは、之を我日本偶然の僥倖と云はざるを得ず。今の時勢に至ては武家の復古も固より願ふ可きに非ずと雖ども、仮に幕政七百年の間に王室をして將家の武力を得せしむる歟、又は將家をして王室の位を得せしめ、至尊と至強と相合一して人民の身心を同時に犯したることあらば、逆も今の日本はある可らず。或は今日に至て彼の皇學者流の説の如く、政祭一途に出るの趣意を以て世間を支配することあらば、後日の日本も亦なる可し。今其然らざるものは之を我日本人民の幸福と云ふ可きなり。故に云く、支那は独裁の神政府を万世に伝へたる者なり、日本は神政府の元素に對するに武力を用ひたる者なり。支那の元素は一なり、日本の元素は二なり。此一事に就て文明の前後を論ずれば、支那は一度び変ぜざれば日本に至る可らず。西洋の文明を取るに日本は支那よりも易しと云ふ可し。

前段或人の言に、各其國体を守て西洋の文明を取捨す可し云々の論あり。國体を論ずるは此章の趣意に非ざれども、他の文明を取るの談に當て、先づ人の心に故障を感ぜしむる者は國体論にして、其甚しきは國体と文明とは並立す可らざる者の如くして、此一段に至ては世の議論家も口を閉して又云はざる者多し。其状恰も未だ鋒を交へずして互に退くが如し。逆も和戰の成行は見る可らず。況や其事理を詳に論